

地域との関係からみた大田植の変化
——島根県安来市広瀬町比田地区の場合——

Change of Ōtaue Related with Regional Transformation:
A Case of Hida District, Yasugi City, Shimane Prefecture

高野 宏
TAKANO, Hiroshi

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要
第46号 2018年11月 抜刷
Journal of Humanities and Social Sciences
Okayama University Vol.46 2018

地域との関係からみた大田植の変化

—島根県安来市広瀬町比田地区の場合—

高野 宏*

I はじめに

村落の祭礼などに付随し、地域での生活や信仰と結びつきながら民間に伝承されてきた芸能は、能や狂言など、専門の芸能者による芸能と区別して「民俗芸能」と呼ばれる。それは、長らく日本における芸能の起源や発達史を明らかにする手掛かりとして研究されてきた。そこには、芸能の起源を神祭りや民俗芸能の関わりを求める見方や、信仰に立脚している民俗芸能では改作が進まず、過去における芸能の形態（芸態）が残りやすいという見方があった。それゆえ、民俗芸能に関する研究（民俗芸能研究）には、眼前の民俗芸能から「古風」や「始原」のイメージを透かし見ようとする傾向があり、それを同時代的な現象として対象化することが少なかった（久保田 2014）。また、「日本」を研究の基本的な枠組みとしたことから、地域で伝承されてきたことを民俗芸能の特質としながら、それと地域との関係はあまり重視されなかった。

こうした民俗芸能研究のあり方は、1990年代以降、大きく転回した。すなわち、「古風」や「始原」といった原初形態に固執する姿勢が「本質主義」と批判され、同時代的に研究対象と向き合う「現場主義」が主張されていった。結果、従来は省みられなかった民俗芸能と文化財行政との関係、観光による影響、民俗芸能の保存・伝承をめぐる諸課題などが、地域の実情に即して議論されるようになった（岩本 2007など）。また、民俗芸能を社会によって構築され続けるものと看做し、地域や地域を取り巻く社会・経済的な状況の変化から、その芸態や地域的意義の変遷を描く試みもなされている（金 2013など）。近年では、社会と関わりながら民俗芸能を主体的に担っている伝承者の身体性や、民俗芸能の存続・改作に関与するキーパーソンへの注目も高まっている。

他方、本稿で取り上げる大田植は、中国地方の山間部で伝承されているハレの田植え行事である。田の神を祀り、道行き（参加者のパレード）や代掻きの競演のあと、早乙女が楽器の演奏に合わせて田植唄の唱和とともに苗を挿す。その華やかさから安芸・石見地方では「ハナダウエ（花田植）」「ハヤシダ（囃田）」などと呼ばれ、牛馬供養の儀式が付け加わる出雲・備後地方では「ウシクヨウ（牛供養）」「クヨウダ（供養田）」などと称される。

これら大田植は、田楽が芸能として成立する以前の芸態、とりわけ中世貴族社会で流行した「田植興」の芸態を伝える民俗芸能として注目されてきた（植木 1982など）。また、日本における典型

* 岡山大学大学院社会文化科学研究科准教授

的な稲作儀礼と目されることから、「日本人」の古い信仰を探る上で重要な民俗事象とも看做された(牛尾1986〔1942〕など)。そのため、大田植が日本の芸能史や文化史において有する意義に関しては、厚い研究蓄積がある。しかし、各地で伝承され、上演されている大田植の現状や、今日に至るまでの変化については十分に調査・報告されていない。橋本(1996)や北広島町教育委員会生涯学習課編(2017)等があるものの、上述する民俗芸能研究の動向に対応した研究蓄積はまだまだ薄い。

そこで、本稿では鳥根県安来市広瀬町比田地区のウシクヨウを取り上げ、その今日に至るまでの変化ないし展開を、地域や地域を取り巻く社会・経済的な状況の変化に即して記述・分析する。具体的には、①ウシクヨウが伝播・定着した江戸後期から明治期、②ウシクヨウから新しい芸能が派生して独自の展開をみた大正・昭和期、③伝統文化や観光資源として保存・活用される平成期の三段階を設定し、それぞれに上演の状況やその歴史的・社会的背景、地域の意義を探っていく。これら

らを統合することで、ウシクヨウという民俗芸能がたどった軌跡を地域との関係から動態的に捉える。調査方法は、地域住民への聞き取りを中心とし¹、市町村史や統計書等の文献資料を補足的に用いた。

なお、比田地区を選定した理由は、大田植(ウシクヨウ)が開始された年代や経緯が比較的詳細に判明している数少ない事例であり、そのことが民俗芸能の変化を扱う本稿の目的に適するからである。



図1 比田地区の位置と関連する地点

資料：国土地理院発行5万分の1地形図「横田」。

II 地域概観およびウシクヨウの概要

1. 地域概観

広瀬町比田地区は、鳥根県の東部、安来市街から南へ30kmのところの位置する山間部農村である(図1)。梶福留・西比田・東比田の3大字の範囲が同地区に該当し、人口規模は417世帯、1,065人である(2018〔平成30〕年7月末現在)²。標高

¹ 現地での聞き取り調査は、2007年5月から2011年9月にかけて7回実施した。インフォーマントは、比田地区在住の男性5名(生年はそれぞれ1926〔大正15〕年、1928〔昭和3〕年、1929〔昭和4〕年、1943〔昭和18〕年、1951〔昭和26〕年)である。

² 安来市HP (<https://www.city.yasugi.shimane.jp/shisei/tokei/jinkotokei/tokei-h30.data/0000004.pdf>) の数値より算出(最終閲覧日:2018年8月20日)。

は、集落や耕地がある地点でも400m前後に達する。同地区のまとまりは、旧・比田村に起因する。すなわち、江戸後期に上記3大字は、それぞれ梶福留村・西比田村・東比田村として広瀬藩に属していたが、1889（明治22）年に合併して能義郡（現・安来市域に相当）比田村となった。その後、1955（昭和30）年に同郡広瀬町と合併して村は消滅したが³、66年間に及ぶ村制の影響は強く残った。広瀬町が安来市の一部になった今日でも（2004〔平成16〕年～）、地域の共同意識は存在する。

比田地区の基幹産業は、水田稲作を中心とする農業である。2015（平成27）年の統計でも、64.6%に当たる243戸が農業に携わっている³。ただし、山間部に位置することから、同地区は農耕に適してはいなかった。平坦地が少なく、冷涼な気候が二毛作を制限してきたからである。その厳しい農業経営を補ってきたのが、養蚕と子牛の生産を中心とする畜産であった。現在では過疎化・高齢化が進み、比田地区を含む広瀬町全域が特定農山村地域に指定されている。同町の人口と高齢化率は、1960（昭和35）年には11,508人・8.1%であったが、2015年には7,192人・34.5%になった⁴。

なお、比田地区3大字のうち、中心的な位置を占めてきたのは西比田である。比田村の時代、西比田の町集落には村役場があり、商店も多くあった。現在ではその面影も薄くなったが、幹線である国道432号線沿いに商店や各種公共施設（郵便局・小学校・駐在所等）、後述する産地直売施設「比田いきいき交流館」等が立地している。また、西比田は、中国山地で栄えた製鉄業との関わりも深い。黒田集落には全国に約1,200社ある金屋子神社の総本山が鎮座し、市原集落には江戸時代からたたら場があった。このたたら場は、明治期における製鉄業の衰退で一時中断していたが、1938（昭和13）年から1947（昭和22）年ごろにかけて軍刀の生産を目的に復興されている。

2. ウシクヨウの概要

1946（昭和21）年開催時を例に、その形式（式次第・芸態）を紹介する（図2）。なお、当日の様子は、元・比田郵便局長の若月氏による『見聞録』（比田村でのさまざまな出来事を記録した冊子、比田公民館所蔵）に詳述されている。聞き取り結果も踏まえ、全体を復元した。

ウシクヨウは「牛の勢揃え」か

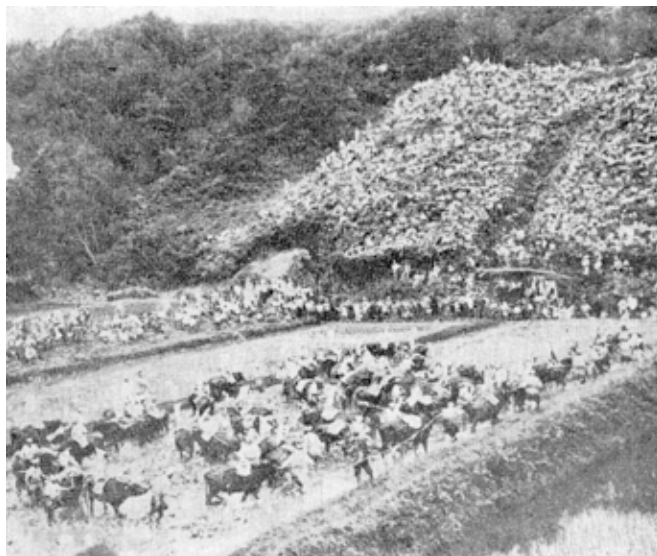


図2 1946年のウシクヨウ

資料：広瀬町史編纂委員会（1968: 311）より転載。

³ 『国勢調査』および『世界農林業センサス』の数値より算出。

⁴ 『国勢調査』の数値より算出。

ら始められた。場所は、西比田国民学校(現・比田小学校)の校庭であった。飾牛は、彫刻が施された飾鞍に「牛供養」と染め抜いた旗を立て、飼い主に先導されて入場した。鑿(横打ち式の大太鼓)・小太鼓・笛からなる囃子方、天狗の面をつけた猿田彦、旗持ち、サゲ(田植の指揮者)、早乙女、儀式を執り行う縄久利神社(大字東比田)の神官と大山寺(鳥根県大山町)の僧侶もそこに加わった⁵。

参加者が全て校庭に揃うと、一同で会場となる水田(斎田)まで練り歩く道行きが行われた。隊列は、猿田彦、旗持ち、囃子方、サゲ・早乙女、僧侶、神輿を担いだ若者、神官、儀式で使用する経文を背負った馬(3頭)、飾牛(20頭程度)の順番であった。この道行きの途中、囃子方は祇園囃を演奏し、僧侶は法螺貝を吹くが、鑿は「さがり藤胡蝶の舞」と称する舞踊とともに楽器を演奏した。こうして参加者一同は、沿道の観客から声援を受けながら、国民学校から約500m離れた足小谷(大字西比田・古市集落)の斎田まで行進した(図1参照)。

斎田には、上中下段の三枚からなる棚田が選定された。両側に小山があり、観覧に適することが選定理由であった。三枚の水田のうち、上段の入口には左右に祭壇が設けられた。すなわち、田に向かって左が神式による牛馬の降霊祭壇であり、右が仏式による牛馬の慰霊祭壇であった。道行きが終り、一同が会場に到着すると、これら祭壇の前で牛馬供養の儀式が神仏混濁で執り行われた。神官・僧侶は祭壇に登り、祝詞の奏上と大般若経の転読ののち、飾牛を一頭ずつ祓い清めて功德を授けた。飾牛とその飼い主は、儀式を終えたものから斎田に入り、隊列を整えて代掻きに移行した。

ウシクヨウでの代掻きは、田植の準備ではなく、同行事を中心であった。斎田の両脇に陣取った観客は、飾牛の体格や気性、飼い主の操牛術を鑑賞・評価し、彼らに歓声や罵声を浴びせた。飼い主たちもウシクヨウの代掻きに参加すること、とくに隊列の先頭(イチバンウシ [一番牛])で衆目を集めることを誇りとした。それゆえ、代掻きの演目(ツナ[綱])には、「鶴の巢籠り」など、複雑で競技性が高いものが好まれた。この日の飾牛は上段の斎田でツナを披露した後、中段で隊列を整え、下段で上段と同じツナを再度披露した。それがツナを変えて3～4回繰り返された。

代掻きの後、囃子方・サゲ・早乙女が斎田に入り、田植作業を行った。『見聞録』には、「(囃子方は)鑿太鼓笛に合せて舞乍ら太鼓を打ち退き其前に早乙女数十人揃いの赤白の単物(マツ)に牛供養と染抜きたる手拭を被り赤襷を掛け田を植える。佐下は早乙女(マツ)の跡にて歌を歌う」(括弧内は筆者)とある。ここでの囃子方の演奏が「植え拍子」、舞踊が「鶴の舞」であった。この田植作業の完了をもって、ウシクヨウの式次第が終了した。

Ⅲ ウシクヨウの伝播と定着(江戸後期～明治期)

本章では、まず、ウシクヨウが外部からもたらされ、比田地区に定着した過程について述べる。次いで、その歴史的・社会的な背景を地域の観点から探る。

⁵ 比田地区では、縄久利神社と大山神社とは姉妹の関係で、ともに家畜の守護にご利益があるとされる。

1. ウシクヨウの起源

伝承によれば、比田地区におけるウシクヨウの起源は、文化年間(1804~1817年)に遡る。端緒は、大字西比田・待神社の遷宮であった(図1参照、正確な年代は不明)。待神社は、追神集落の氏神ではないが、同集落の住民が信仰する土地の守護神である⁶。同神社の遷宮に際し、追神集落では記念式典の内容が談議され、従来にはない新芸能の奉納が決定された。そこで、彼らが周辺地域から習得してきたのがウシクヨウであった。すなわち、当時、比田地区に近い備後地方の北部(現・庄原市付近)では、牛馬供養を目的とした大田植が流行していた。そこで、彼らは演目をウシクヨウに定め、付随する儀式や芸能(楽器の演奏や舞踊など)を同地域から習得してきたのである。

かかる経緯で始められたウシクヨウは、その後も待神社の神田御田植式で披露されたほか、牛馬供養の儀式としても時々行われたとされる。しかし、それが比田地区全体に広まるどころか、追神集落でも定着することはなかったらしく、伝播から暫くして衰退してしまった(広瀬町史編纂委員会 1968: 310)。それゆえ、この最初期のウシクヨウは、伝承から存在が確認される程度である。芸態や式次第、参加者や費用負担の在り方等の具体的な事柄は、全く不明である。

2. ウシクヨウの定着

江戸後期に伝播し、すぐに衰退したウシクヨウであるが、明治期に家畜商(牛馬の仲買人)の主催で再び行われるようになった。広瀬町史編纂委員会編(1968)、明本(2003)、現地の記録資料⁷、および筆者の聞き取り結果から、その経緯をまとめる。

- ・ 追神集落に安部田嘉右衛門(1820~1897年)なる人物が住んでいた。彼は、父の代に移住してきた新住民で小農であったが、家畜商を開業すると才覚を現し⁸、近郷で名伯楽(家畜商と獣医を兼ねた人物)として名を馳せた。また、屋敷周辺の土地を開墾するなど、営農にも熱心に取り組む、一代で一町歩以上の土地を集積した。
- ・ 明治初年、嘉右衛門は、商売で訪れた備後地方北部で牛馬供養の大田植を見聞し、家畜商として大いに感銘を受けた。彼は、それを自分でも行うべく、追神集落の若者6名を連れて備後地方に赴き⁹、祭式や芸能(太鼓踊りの「さがり藤胡蝶の舞」と「鶴の舞」)を習得した。後には、同地方から講師を招聘し、再度追神集落の若者たちにそれを習わせた。
- ・ 一回目のウシクヨウは、嘉右衛門自身が開墾した「狼原新田」(図1参照)で1875(明治8)年に開催された。追神集落の住民が演者となり、近隣からも見物人が集まった。同氏は、1879(明治12)年にも二回目のウシクヨウを開催している。祭式・芸能の習得や行事の開催にかか

⁶ 追神集落の氏神は、金屋子神社(集落の西半分が氏子)と比太神社(集落の東半分が氏子)である。

⁷ 「広瀬町無形文化財(頭打)牛供養式及び頭打に就いて」と題された冊子。ウシクヨウやカシラウチの歴史等が手書きで記されている。表紙には「広瀬町追神供盛団編集部 昭和五十五年九月」と記入されている。

⁸ 備後地方で買入れた牛を大阪方面に売り渡す、いわゆる「上方博労」であったとされる(明本 2003: 3)。

⁹ 嘉右衛門に同行した若者の人数については、「二三名」(広瀬町史編纂委員会 1968: 310)とされるなど諸説ある。この記述では、若者全員の氏名が記されている現地の記録資料(注8)に基づく。

る費用は、すべて嘉右衛門の負担であった。

- ・以降、明治期の比田村では、「家畜商は一生に一度はウシクヨウを開催すべき」との風潮が広まった。1902（明治35）年には葉山氏が東比田の字栗原で、1906（明治39）年には上田氏が西比田の字追神で、それぞれ開催した。

注目点は、第一に、ウシクヨウの開催例が明治期を通じて複数回確認されることである。これより、この段階において初めて、大田植が比田地区に定着したと判断できる。第二に、ウシクヨウに関する従来の知識が明治初期までに途絶えていた点である。ゆえに、江戸後期と同一経路での伝播にも関わらず、異なった意味合いでウシクヨウが開催されている。

なお、嘉右衛門が1875年にウシクヨウを開催した動機には、①「狼原新田」の開墾が終了した記念、②今日まで取り引きした牛馬の慰霊、③商品であった馬の相次ぐ死亡の三説がある。どれも可能性があるが、彼が開催時に建立した石碑には、5頭の馬の特徴と命日と思しき年月日が刻まれている。ここから、③が直接的な理由として、演者・観客たる地域住民に提示されたと推察できる。

3. 家畜商をめぐる社会的状況

以上、ウシクヨウの伝播・定着の過程をみたが、明治期にそれが定着した理由（歴史的な必然性）や、家畜商がその中心的な担い手になった理由（社会的な必然性）は判然としない。とくに後者に関しては、安部田氏が追神集落の旧家などではなく他集落出身の新住民であった点、家畜商らの個人的な思惑・動機で多数の地域住民が動員された点が注目される。

本節では、江戸後期から明治期の家畜商をめぐる社会的状況を整理する。具体的には、鳥根県における畜産の発達史を略述し、牛馬の流通構造から当該期間における家畜商の社会的地位を考察する。そのうえで、次節にて上記二点の疑問を検討する。

a) 畜産業の発達 鳥根県では江戸時代から牛飼養・牛生産が盛んであった。それには、放牧に適した中国山地の地形のほかに、農家の副業として牛馬による砂鉄や銑の駄送が行われたことなど、同地域の製鉄業が関与していた。加えて、江戸後期には、中国地方で牛耕の普及と畜牛の商品化が起こり、畜牛の血統（「蔓」）が各地で開発された。鳥根県でも、千貫蔓（簸川郡）・ト蔵蔓（仁多郡）・花田蔓（邑智郡）が天保～安政年間（1830～1859年）に開発された。ただし、この段階の牛飼養・牛生産は、あくまでも農耕に付随する活動（牧畜）であり、明確な体系や組織を伴わなかった¹⁰。

鳥根県でそれが「畜産（業）」として確立するのは、明治期である。この時期には、製鉄法の近代化と洋鋼の輸入により、中国山地の製鉄業は衰退した。これに伴い、農家の副業であった駄賃稼ぎも大幅に減少した。農家は、収入を補うために駄馬飼育を縮小する一方、畜牛の飼養・繁殖に傾注した（岩永 1961）。かかる状況下で、政府や県が積極的な畜産政策を展開し、畜産の近代化を推進したのである。なお、明治期における畜産政策は、①種牡牛の質の向上と管理体制の確立、②獣

¹⁰ 『鳥根縣之畜産』（1913）には、「舊藩時代に於ては別に保護奨励法なく只農家か肥料を得るの目的と耕作運搬に使役するの目的にて飼養せしのみ」（鳥根縣内務部 1913:3）とある。

表1 鳥根県および関係地域における畜産業の発達状況

	1884 (明治17) 年					1911 (明治44) 年				
	飼養頭数 (頭)		生産頭数 (頭)		牝牛率 (%)	飼養頭数 (頭)		生産頭数 (頭)		牝牛率 (%)
	総数	農家一戸 当たり	総数	農家一戸 当たり		総数	農家一戸 当たり	総数	農家一戸 当たり	
鳥根県	58,713	0.53	6,173	0.06	50.1	78,487	0.69	15,825	0.14	57.9
能義郡	3,115	0.48	290	0.04	57.8	6,475	1.17	2,036	0.37	65.6
神石郡	4,970	0.93	545	0.10	58.9	5,796	1.14	1,233	0.24	62.1
甲奴郡	2,270	0.60	350	0.09	47.6	2,779	0.82	886	0.26	66.8
双三郡	6,788	0.64	1,827	0.17	72.3	7,744	0.78	2,594	0.26	86.0
比婆郡	7,582	0.70	498	0.05	56.4	16,831	1.68	3,653	0.36	69.1

資料：『鳥根県統計書』、『廣島縣統計書』より作成。

医等の専門家の育成、③一般畜産家（農家）の啓蒙、④畜産組合設立の促進に要約される。これらのうち、最も肝要なのは④であった。次章とも関連するため、この点を詳述する。

行政と一般畜産家をつなぐ中間組織の欠如は、1884（明治17）年の畜産諮詢会ですでに認識されていた。しかし、当時の農政は未熟で、この問題意識が全国的な法制度に結実するのは、1900（明治33）年施行の産牛馬組合法においてであった。鳥根県では、1886（明治19）年の隠岐産牛馬組合の設立以降、旧来の産牛地域を中心に畜産組合の設立が漸次みられたが、同法の施行によりそれが全県的な運動に展開した。1905（明治38）年には郡単位の畜産組合が出揃い（能義郡での設立は1902〔明治35〕年）、1906（明治39）年には上位組織の鳥根県産牛馬組合連合会も設置された。県は、これら畜産組合に牛馬籍の管理や各種の報告義務を課して畜産の掌握を図る一方（牛馬籍整理規則〔1906年〕など）、産牛馬組合奨励費支給規定（1906年）や優良種牝牛の貸与（鳥根県内務部 1913：4）にみられるように、畜産奨励策の受け皿としてそれらを活用した。

このように、鳥根県の畜産は、製鉄業との関連で江戸時代に萌芽し、その衰退に刺激されて明治期に発達した。その変化を統計的に整理したのが表1である。1911（明治44）年における鳥根県内の牛飼養頭数・牛生産頭数・牝牛率¹¹は、1884年に比べ、33.7%・156.4%・7.8ポイントずつ伸びている。また、同表には、比田地区が属していた能義郡と、ウシクヨウの習得先である備後地方北部の4郡における値も示した。後者が前者に対する畜産の先進地域であったこと、前者では明治期を通じて畜産が著しく発達し、明治末には後者に並ぶ産牛地域に発展したことが看取される。

b) 家畜商の社会的地位 次に、江戸後期から明治期における家畜商の社会的地位について述べる。地域社会での彼らの具体的な役割に関する記録は存在しないが、当時の牛馬流通から考察する。

明治末まで、鳥根県での牛馬流通は、現在のような常設家畜市場での競り取引とは異なっていた。神社の境内等を利用した臨時市場が各地で開かれ、そこに売り手と買い手が集まり相対取引を行った。開市は、農作業との関係から、春（4月）と秋（9～10月）の二回が多かった。基本的な取引方法は、「賣主買人互ニ袖中ニテ指頭ヲ握リ價格ヲ示シ双方合意ノ上賣買成立スルトキハ拍手シテ

¹¹ 牝牛率は、全飼養頭数に占める牝牛の割合を指し、産牛地域のメルクマールとなる。

取引ノ確定ヲ表證スル」(第三回中國五縣聯合畜産共進會鳥根縣協賛會 1903: 50)のものであった。

また、当時の家畜市場は、「之か取締に關しては一定の規定なく、市場の設備、売買の方法等も各所之を異にし」(鳥根県内務部 1913: 24)とあるように、きわめて慣習的なものであった。市場の近辺に「問屋(臨時の宿泊所)」を営む者がおり、開市に際しては彼らが施設を整えるのが一般的であった。開市中も彼らが「牛馬ヲ保護シ繋場厩舎秣桶等ヲ貸與シ飼料購入ノ紹介ヲ為ス等」(第三回中國五縣聯合畜産共進會鳥根縣協賛會 1903: 50)、来市者にあらゆる便宜を図った。つまり、家畜市場の運営は、その良不良を含めて問屋が全てを担っていた。

そして、上述の相対による牛馬取引は、相牛法(優良な畜牛を見分ける方法)や家畜の相場に関する知識を持たない一般畜産家に対して閉鎖性を有していた¹²。結果、畜産家が家畜市場に出向くことは稀で、近隣に居住する家畜商の「厩先(得意先の意)」になり、彼らを通じて家畜を売買していた。『明治二十一年度 鳥根縣畜産及獸醫調査』(1891)には、「博勞ノ常ニ牛馬売買ノ間ニ立チ」(農商務省 1891: 頁数の記載なし)との記述がみえる。

このように家畜商は、江戸後期から明治期の牛馬流通において、問屋とともに重要な役割を果たしていた。加えて、彼らは家畜飼養でも地域の指導者となる場合が多く、「畜産改良上」にも影響力を有していた(廣島縣畜産組合聯合會 1981〔1931〕: 747)。かかる家畜商の社会的地位の高さは、とりわけ中国山地の産牛地域で顕著であったと推察され、比田地区でも明治期における畜産の発達に伴い、家畜商が地域社会での影響力を急速に強めたと考えられる。

4. 家畜商によるウシクヨウの背景

以上から、明治期においてウシクヨウが定着した理由、家畜商がその中心的な担い手になった理由に関して、次のごとき一連の推論が成り立つ。

- ①文化年間、備後地方北部ではすでに牛飼養・牛生産が一般化しつつあった。それに伴い、牛馬供養の大田植も次第に定着していった。
- ②一方、比田地区の畜産は未成熟で、牛馬供養の必要性を感じる者は少なかった。ゆえに、ウシクヨウを備後地方北部から習得した際、それを土地の守護神への奉納芸として、本来的な含意とは関係なく形式のみを受け入れた。そのため、長期間芸能が保持されることはなかった。
- ③明治期には、比田地区でも畜産の発達がみられ、備後地方北部に比肩する産牛地域に成長した。農家での牛飼養・牛生産が一般化し、牛馬供養という儀式的目的を理解し得る心理、ウシクヨウに付随する代掻きの競演を娯楽として楽しめる心情が、地域住民に広く醸成された。
- ④同時に、牛馬流通を担う家畜商が地域社会での影響力を増した。その初期段階で活躍したのが嘉右衛門であった。彼は、新住民であったが、家畜商の開業で地域社会での中心人物になった。それにより、彼主導でのウシクヨウの習得・開催の提案は、地域住民に自然と受け入れられた。

¹² 『日本馬政史』には、中国地方における最大規模の家畜市場であった鳥取県大山牛馬市での取引状況が報告されており、その閉鎖性をうかがうことができる(帝國競馬協會1982〔1928〕: 677-678)。

- ⑤嘉右衛門が繰り返しウシクヨウを開催するなかで、「家畜商は一生に一度はウシクヨウを開催すべき」との認識が社会的に醸成されるに至った。他方、社会的に成功した家畜商が地域住民を巻き込んで大規模な祭礼行事を行うことは、彼らの名誉心を満たすことでもあった。

IV ウシクヨウの衰退と地域的展開（大正・昭和期）

比田地区でのウシクヨウは、明治期以降、急速に衰退する。大正期に開催例はなく、昭和期にも1946年の青年団主催のものが確認されるのみである。しかし、当地からウシクヨウの芸能が消滅することはなかった。芸能の伝承団体（「供盛団」^{きょうせいだん}）の活動のなかで、それはカシラウチ（頭打ち）へと形態を変えて存続した。本章では、こうしたウシクヨウの衰退と地域的展開について述べる。

1. ウシクヨウの衰退

a) ウシクヨウの衰退理由 文献資料・現地調査のいずれからでも、大正期にウシクヨウが衰退した理由は判明しなかった。ここでは、前章にならい、牛馬流通の変化からそれを考察したい。

明治期の牛馬流通は、家畜商の仲介によって成立していた。しかし、畜産の近代化を企図する政府や県はそれを問題と捉えた。すなわち、牛馬流通を担う家畜商の質が必ずしも高くなく、取引される家畜に対し家畜商が過多であることから不正取引が横行し、畜産の発展が著しく阻害されていると考えられた（農商務省 1891: 頁数の記載なし；島根県内務部 1916 : 55）。

これに対し、政府・県は二つの対応策をとった。一つは、畜産家自身による開かれた牛馬流通の構築である。政府は、1911年の家畜市場法により、畜産組合に家畜市場の開設を許可し、その地位を市町村営のものと同等とした。県も1906年に犢駒売買取締規則を發布し、各畜産組合に子牛・子馬の競り市場開設を義務付けていたが、1911年にはさらに「本縣内ニ生産シタル犢駒ハ…其ノ所属産牛馬組合ノ行ウ糶賣ニ付ス」（島根県内務部 1913 : 付録31）べき旨を附則で定めた。もう一は、家畜商に対する管理体制の確立である。政府は、牛馬商取締規則を1911年に發布し、家畜商を鑑札制とし、彼らの不正を取り締まった。県も1906年に牛馬売買営業者取締規則を定め、未成年者、素行不良者、犢駒売買取締規則ならびに各畜産組合の定款の違反者を家畜商から排除している。

結果、牛馬流通は大きく変化し、大正期以降、牛馬流通の中核から家畜商が次第に外されていった。1916（大正5）年における県内50の家畜市場のうち、34が畜産組合の経営、6が町村の経営であった（島根県内務部1916 : 54）。家畜商主催によるウシクヨウの衰退は、こうした牛馬流通の変化に起因する現象と解釈される。

b) 青年団のウシクヨウ 1946年6月、1906年以来のウシクヨウが古市集落の足小谷で開催された。これが大正・昭和期で唯一の開催となるが、明治期のそれとは目的や意義を異にしていた。

当時の比田地区は、戦地からの復員が叶い、以前の賑わいを回復しつつあった。そこで、戦禍を乗り越えた地域を活気づけるため、比田村の青年団がウシクヨウの開催を発起した。費用は、島根県農会能義支部と比田村農会を共催者とし、近郷の家畜商からも寄付を募って捻出した。開催準備

は、青年団員が集落ごとに役割分担して行い、牛や飾鞍も彼らが手分けして村内から集めた。ウシクヨウの記憶は薄らいでいたが、後述の「供盛団」が芸能を保持しており、開催は容易であった。

当日の式次第等はⅡの2で紹介したが、『見聞録』には「斎田の脇には県知事県官共他観覧場所が小屋掛があり…店屋も色々ありて金屋子炬からも鎌鉋刀等の売店も出来て居る」や、「観覧の人も数千人と狭い谷の両側の小山に陣取り」、「遠くは亀嵩布部山佐等より集まり来る人夥し」との記述がみられる。これらは、当日の雰囲気や、ウシクヨウの地域的意義を考察するうえで興味深い。なお、亀嵩・布部・山佐は、会場からそれぞれ約6km、約9km、15~20km離れた村外の集落である。

このように、1946年のウシクヨウは、一集落の共同で実施される小規模で局地的な行事でも、家畜商の個人的な動機から開催される儀式でもなかった。有力な推進者を失った結果、それは公共的な意義と手続きをもって遂行される、大規模で開放的な地域イベントに移行した。公人の観覧、遠方からの来客、多様な出店の存在などが、それを象徴している。また、「地域の活性化」という包括的な目標設定のもと、牛馬供養という行事本来の目的が希薄化・相対化している点も注目される。

2. カシラウチの創出

大正・昭和期には、ウシクヨウが衰退する一方、その派生芸能であるカシラウチが生み出された。

カシラウチ創出の基盤は、嘉右衛門が芸能の習得後すぐに結成した、ウシクヨウに付随する芸能の伝承団体であった。正確な結成年や当初の団体名は不明であるが、追神集落の男性を構成員とし、初代「元締（伝承団体の長、現在は「会長」と呼ぶ）」に嘉右衛門自身が就任している。同団体は嘉右衛門の死後も存続し、民俗芸能の中心的な伝承母体となった。彼らは、明治期における四度のウシクヨウ、1946年のウシクヨウで道行きと田植囃子を披露した。

この伝承団体は、ウシクヨウの開催が止むことで本来的な役割を終えたが、芸能を絶やすのを惜しみ、大正初期からは「カシラウチ」として、ウシクヨウの道行き部分だけを上演するようになった。そして、このことが芸能の性質において、以下のような転換をもたらすことになった。

- ・田植作業から切り離されることで、上演の時期と場所に制約がなくなった。
- ・牛馬供養の儀式から切り離されることで、上演の目的に制約がなくなった。
- ・上演にかかる費用が著しく低下した。

これらにより、芸能の上演はきわめて自由になった。結果、ウシクヨウの芸能に対する伝承団体は、ウシクヨウの衰退後にかえって活動を活発化させた。

1918(大正7)年には、団体名称を「供盛団」と正式に定め、団員の装束を藍染の千早に統一した¹³。また、1950年代に追神集落が後述の「ニギワイ(賑わい)」に参加するようになると、カシラウチの芸態にも創意を凝らすようになった。すなわち、当初のカシラウチを構成する舞踊は「さがり藤胡蝶の舞」のみであったが、そこに「鶴の舞」(田植え時の舞踊)と新考案の「龍の舞」・「玉の

¹³ 布部村での催事で、追神集落の若者たちがカシラウチを披露したことがきっかけである。来賓であった県会議員の濱田忠之助と安部金衛門がその芸に感動し、団体名称を提案するとともに、千早数着を贈呈した。

舞」を加えて、独立した芸能として成立させるために全体を再構成したのである。

3. 供盛団の活動実態

最後に、大正・昭和期における供盛団の活動実態を芸能の伝承形態と活動履歴とに分けて記述する。

表2 供盛団の活動履歴 (1918~1981年)

年	月 日	上演内容	上演の場所	催事の名称	備考
1918	?	カシラウチ	布部村	?	
1933頃	?	カシラウチ	木次町	?	
1934頃	?	カシラウチ	安来市	畜産共進会	
1935頃	?	カシラウチ	大社町	林産共進会	
1946	6月23日	道行き 田植囃子	古市集落 (西比田)	ウシクヨウ	比田村青年団主催
1948	?	カシラウチ	松江市	観光博覧会	
1951	8月20日	カシラウチ	町集落 (西比田)	ニギワイ	旧暦18日
1953	8月28日	カシラウチ	町集落 (西比田)	ニギワイ	旧暦18日
1954	8月16日	カシラウチ	町集落 (西比田)	ニギワイ	旧暦18日
	10月1日	カシラウチ	安来市	畜産共進会	
1955	9月4日	カシラウチ	町集落 (西比田)	ニギワイ	旧暦18日
1957	8月18日	カシラウチ	町集落 (西比田)	ニギワイ	
1958	8月18日	カシラウチ	町集落 (西比田)	ニギワイ	
1959	8月18日	カシラウチ	町集落 (西比田)	ニギワイ	
1960	4月24日	カシラウチ	縄久利神社 (東比田)	同神社祭礼	
	8月18日	カシラウチ	町集落 (西比田)	ニギワイ	
1961	4月24日	カシラウチ	縄久利神社 (東比田)	同神社祭礼	
	8月18日	カシラウチ	町集落 (西比田)	ニギワイ	
1962	4月24日	カシラウチ	縄久利神社 (東比田)	同神社祭礼	
	8月18日	カシラウチ	町集落 (西比田)	ニギワイ	
	8月24日	カシラウチ	三成愛宕神社 (三成町)	同神社祭礼	
	12月2日	カシラウチ	横田町	同町催事	
1964	8月18日	カシラウチ	愛宕神社 (西比田)	同神社祭礼	飛び入り参加
	12月20日	カシラウチ	横田町	?	
1965	8月17日	カシラウチ	亀嵩	?	
	8月18日	カシラウチ	町集落 (西比田)	ニギワイ	
1966	8月18日	カシラウチ	町集落 (西比田)	ニギワイ	
1967	8月18日	カシラウチ	町集落 (西比田)	ニギワイ	
1971	8月19日	カシラウチ	愛宕神社 (西比田)	同神社祭礼	有志での上演
1972	8月18日	カシラウチ	町集落 (西比田)	ニギワイ	広瀬町教育委員会視察
1973	8月18日	カシラウチ	町集落 (西比田)	ニギワイ	
1974	8月18日	カシラウチ	町集落 (西比田)	ニギワイ	
1975	8月18日	カシラウチ	町集落 (西比田)	ニギワイ	
1976	8月18日	カシラウチ	町集落 (西比田)	ニギワイ	
1977	8月18日	カシラウチ	町集落 (西比田)	ニギワイ	
1978	8月18日	カシラウチ	町集落 (西比田)	ニギワイ	
	8月24日	カシラウチ	三成愛宕神社 (三成町)	同神社祭礼	祝儀：172,000円
1979	8月18日	カシラウチ	町集落 (西比田)	ニギワイ	
1980	8月18日	カシラウチ	町集落 (西比田)	ニギワイ	広瀬町文化財保護委員視察
	8月24日	カシラウチ	三成愛宕神社 (三成町)	同神社祭礼	祝儀：176,000円
1981	5月1日	カシラウチ	広瀬町公民館	除幕式	
	8月18日	カシラウチ	町集落 (西比田)	ニギワイ	
	8月24日	カシラウチ	三成町	?	

資料：供盛団資料より作成。

これにより、地域住民による民俗芸能への具体的な関わりや、ウシクヨウから派生したカシラウチが、地域の実情に合わせて意味合いを変えつつ上演される様子が理解できる。

a) 芸能の伝承形態 供盛団における芸能の伝承形態は閉鎖的であった。結成当初より、団員は追神集落の男子に限られていた。厳密には、当該の男子は長男である必要があり、一軒から二名以上の団員を出すことも許されなかった。それゆえ、同集落に生まれた長男は10代半ばで供盛団の団員になる、その父親は長男の入団とともに退団するのが原則であった。また、団員が戸主か将来の戸主となることから、大正期から1950年代まで、「元締」は区長の役割でもあった。高度経済成長以降、こうした原則は一部崩れたが、現在でも入団と芸能の習得は追神集落の男子に限られている。

b) 活動履歴 表2に供盛団の1918～1981(大正7～昭和56)年における活動履歴をまとめた。大正・昭和期を全てカバーしていないが、実態は十分に捉えられる。

1940年代までの活動は、それ以降の年代における活動と比べて低調である。畜産共進会等の公的なイベントで上演することが主であり、自主的な上演機会を欠いていたことが原因である。

そうした状況は、「ニギワイ」と称する行事の開始(1951〔昭和26〕年)で変化する。それは、追神・市原・町・殿之奥の4集落(いずれも大字西比田)が風流芸を出し合い、通例8月18日の夕刻から、西比田の中心的な通りを練り歩くものである。同行事が開始された背景には、終戦後の娯楽に対する欠乏感と愛宕神社の祭礼とがあった。つまり、4集落はそれぞれ愛宕神社を祀り、8月18日前後に集落ごとの祭礼を終える。この共通したハレの期間を利用し、娯楽性の高い地域イベントを創出した¹⁴。これによって供盛団は、自主的で継続的な上演機会を獲得した。

1960年代には供盛団の活動が活発化し、大正・昭和期におけるピークを迎える。ニギワイへの参加が継続的に行われ、他地域での上演も多い。活動が活性化した原因は、以下の三点であった。

- ・ニギワイの集客力が高まり、他地域でもカシラウチの知名度が向上、上演依頼が増加した。
- ・他地域での行事やイベントに上演した場合、主催者や観客から多額の祝儀がもたらされた。それが団員の活動意欲を高めた¹⁵。
- ・高度経済成長に伴う兼業化の進展で、一軒一名の原則では上演当日の演者確保が難しくなった。結果、子供の入団後も父親が引退しなくなり、一時的な団員の増加が起こった。

1970年代以降の活動は沈静化し、再びニギワイへの参加が中心となる。ただし、従来と異なる点は、地域でのとある出来事でニギワイの意味が変化したことである。すなわち、当初、ニギワイには宗教的な目的は付与されておらず、愛宕神社の祭礼は集落間での日程調整に使用されただけであった。しかし、1970年代半ばに大字西比田で火事が連続すると、同行事は火伏の神への奉納行事

¹⁴ 提案は、町集落の愛宕神社当番からあった。なお、1960(昭和35)年ごろまでは演目は安定せず、各集落が持ち寄る芸能(出し物)は変動していた。追神集落は1959～1960(昭和34～35)年からカシラウチを毎年上演するようになった。

¹⁵ 祝儀については、打ち上げの酒肴代を引き、残りを参加した団員で均等分配していた。話し合いによって、楽器の追加・更新に充てたりもした。

として語られていく。1975 (昭和50) 年9月号の『広報ひろせ』は、ニギワイを「比田愛宕神社祭礼」と紹介し、カシラウチについても「前年地区内で大火もありましたので愛宕神社のみたまを慰めてはということになり、挙行された」(供盛団編集部 1975: 863) と解説している。こうした比較的新しい意味でのニギワイの開催とカシラウチの上演は、今日まで続いている。

V 保存・活用されるウシクヨウの芸能 (平成期)

本章では、高度経済成長期以降の社会変化を踏まえたうえで、主に平成期におけるウシクヨウの芸能 (カシラウチを含む) をめぐる動向と、その芸能が担う地域的意義について述べる。

1. 統計にみる社会変化

まず、各種統計を整理し、高度経済成長期以降の比田地区における社会変化をみる。

表3として、比田地区を含む広瀬町における就業構造の変化を示す。表中の「総数」から、産業構造の転換に伴い、地域住民が携わる主要な産業が農業、製造業、サービス業へと順次転換したことが分かる。その一方で、「町内で従業する者」をみると、同町の基幹産業が一貫して農業であると理解される。すなわち、「町内で従業する者の割合」から看取されるように、増加した第二次・第三次産業の従業者の相当数は町外への通勤者である。しかも、その割合は年代を追って高くなる。

表3 広瀬町における就業構造の変化

	1960年			1980年			2000年		
	総数 (人)	町内で従 業する者 (人)	町内で従 業する者 の割合 (%)	総数 (人)	町内で従 業する者 (人)	町内で従 業する者 の割合 (%)	総数 (人)	町内で従 業する者 (人)	町内で従 業する者 の割合 (%)
農業	3,326	3,324	99.9	1,763	1,757	99.7	824	817	99.2
建設業	228	215	94.3	698	431	61.7	516	276	53.5
製造業	499	389	78.0	1,409	936	66.4	1,039	395	38.0
卸売業・小売業	606	565	93.2	847	633	74.7	779	466	59.8
運輸・通信業	235	148	63.0	338	130	38.5	285	75	26.3
サービス業	582	518	89.0	866	647	74.7	1,192	719	60.3
その他	402	346	86.1	402	316	78.6	285	189	66.3
合計	5,878	5,505	93.7	6,323	4,850	76.7	4,920	2,937	59.7

資料：『国勢調査』より作成。

表4 比田地区における世帯構成の変化

	(戸)		
	1960年	1980年	2000年
専業農家	90	35	46
第一種兼業農家	269	114	34
第二種兼業農家	55	246	234
種別不明の農家	0	0	26
非農家	103	100	108
総戸数	517	495	448

資料：『農業集落カード』より作成。

表5 比田地区における農業就業人口の変化

	1960年	1980年	2000年
農家人口 (人)	2,540	1,775	1,386
農業就業人口 (人)	1,185	614	486
農業就業人口に占 める60歳以上人口 の割合 (%)	16.4	33.1	79.8

資料：『農業集落カード』より作成。

このように、高度経済成長期以降の広瀬町は、都市部への流動性・依存性を高める半面、地域の産業基盤を弱体化させている。それと連動し、過疎化と高齢化も進行している（Ⅱの1参照）。

さらに、表4・表5として、比田地区における世帯構成と農業就業人口の変化を示す。これらから、総戸数の減少傾向だけでなく、地域の基幹産業である農業にも大きな変化があったと理解できる。すなわち、専業農家・第一種兼業農家の減少、第二種兼業農家の大幅な増加であり、農家経営においても都市部への依存が強化された。また、1960年以降、農業就業人口の大幅な減少、そこにおける60歳以上人口の割合の上昇も確認される。このように、比較的若い世代が都市部で「勤め人」となる一方、地域の基幹産業は高齢者によって支えられているのが実情である。

2. 社会関係の変化—追神集落の例—

次いで、統計には表れない社会変化を、追神集落での村落運営と共同作業の変化から考察する。

a) 村落運営の変化 比田地区には、村落運営に関わる組織として、集落の全戸による「区」と、近隣の10軒程度で形成する「隣保」とがある。前者は、一般的な町内会（自治会）に相当し、行政と地域住民とを結ぶ中間組織である。それに対し、後者は身近な生活協同の組織であり、地域住民の総意を形成する最小の組織である。村落の運営では、これが区の下部組織となる。

図3として、1950(昭和25)年の追神集落における家屋配置と各種村落組織の範囲を示した。当時の同集落は、専門的な農家33戸で構成され、一つの区をなしていた。区では、区長1名と委員5名が運営にあたり、月1回の寄合と年1回の総会(元旦、2000年からは二月末)を開いていた。行政への陳情や行政からの情報提供は、この区を通じてなされた。そして、隣保には「上組」・「中組」・「下組」の三つがあった。それらでは月1回寄合が開催され、生活上の問題や区の寄合に提出すべき議

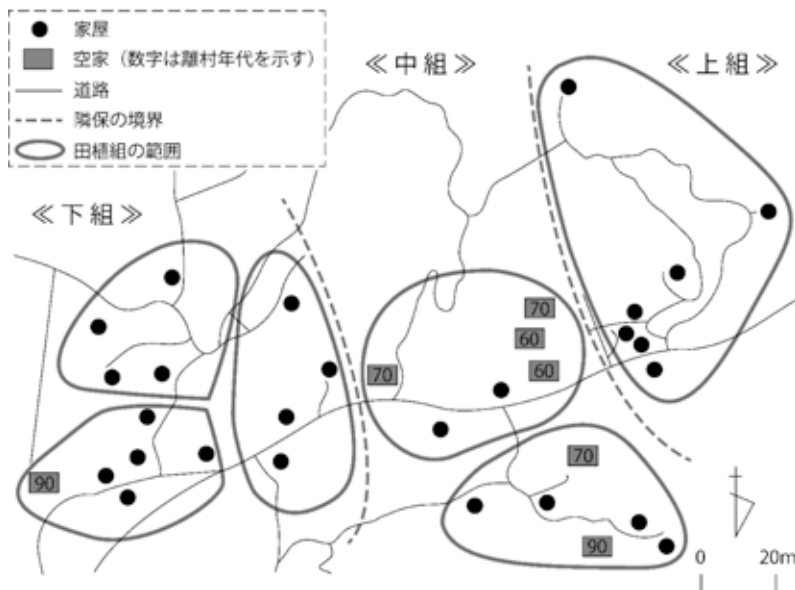


図3 追神集落における家屋配置と村落組織（1950年）

資料：聞き取りにより作成。

題が談議された。また、国民年金や簡易保険等の取りまとめも隣保で行われ、そうした金銭の管理と記録も組長の役目であった。また、図3に、区・隣保のほか、田植組も記入した。ここから、「区>隣保>田植組」という村落組織の入れ子構造が見て取れる。

このように、1950年の追神集落では、区と隣保の連携によって生活問題の意識化や集落での総意形成、行政との交渉を含めた主体間の利害調整がなされていた。田植組を基礎とする日々の生産活動も、かかる村落運営を基礎として展開されていた。しかし、高度経済成長期以降、追神集落の村落運営は大きく転換した。区と隣保での変化を以下に記す。

- ・区：1960年代前半、行政が各世帯に直接連絡するようになり、意義が低下した。寄合の参加者も減少し、総会以外は、特別な議題があるときのみ開催となった（1963〔昭和38〕年より）。
- ・隣保：区と同様、1960年代前半の連絡方法の変化で意義が低下した。加えて、1970（昭和45）年ごろに銀行口座からの自動引き落としが可能になり、各種支払いの取りまとめ機能も失った。それに伴い、寄合が1970年代に廃止された。

すなわち、現在の追神集落では、区・隣保は存続しているが、村落運営に関わる機能を著しく低下させている。村落運営は家々の共同的な総意形成に基づくものから、行政－世帯間の直接的な関係性に基づくものへと変化し、村落は個別世帯の総和へと近づいていった。

b)共同作業の変化 そうした村落の個別世帯化は、共同作業の変化をみることで一層明確となる。

表6は、1955（昭和30）年の追神集落における共同作業の一覧である。当時の同集落では16の共同作業がみられ、そのほとんどが内容に応じて区・隣保・田植組のいずれかで行われていた。図式的に言えば、「農作業＝田植組」、「日常生活での相互扶助＝隣保」、「大規模な祭礼行事＝区」となる¹⁶。こうした組織的な活動を通じ、村落の一体感と濃密な人間関係が醸成されてきた。しかし、今日までにその多くの項目で変化が生じている（「備考」欄）。以下、変化がみられた共同作業を、①

表6 追神集落における各種共同作業の範囲（1955年）

	集落 より大	集落と 一致	組と 一致	田植組	数戸 単位	備考
水がかり					○	
道普請					○	2001年から中止
牧野管理					○	1960～1970年代に廃止
田植				○		1960～1970年代に機械化
代満て				○		1960～1970年代に衰退
除草				○		1960年に除草剤が普及
家普請			○			茅葺の減少で1970年ごろ中止
お見舞い			○			近年簡素化の動向
葬式			○			1970年代から葬儀屋を頼む
うるう講			○			1980年ごろに衰退
米寿・白寿の祝い		○				1950年代に簡素化
待神社祭礼		○				
ケジョ		○				1980年ごろから各家に行う
愛宕神社祭礼	○	○				儀式は集落、祭礼は4集落合同
秋祭り（金屋子神社）	○					

資料：聞き取りより作成。

¹⁶ 道普請・水がかり・牧野管理は、地縁によらず、道や水路を共有する家同士で行っていた。

廃止されたもの、②個別化したもの、③簡略化・外部委託されたものに分け、簡単に紹介する。

①には、道普請、牧野管理、代満て、家普請、閏講が該当する。そのうち、牧野管理と代満ては、農業が機械化され、家畜や合同田植が不要になり廃止された（1960～70年代）。家普請は1970年代の茅葺屋根の減少、道普請は2001（平成13）年のアスファルト舗装の完了で、それぞれ廃止された。うるう講は、閏年の2月に隣保で「厄払い」として共同飲食をする行事だが、「非合理的」との理由から、高度経済成長期から1980年代にかけて廃止された。

②には、田植、除草、ケジョが該当する。前二者は、田植機と除草剤の普及で家族労働力だけで行い得る状態になった（1960～1970年代）。それに伴い、各隣保内の田植組も解散した。ケジョは、集落内の全小祠（水神や荒神など）に対する神祭りである。1955年には、12月の末、昼間に金屋子神社から神官を当屋（氏子総代の家）に招き、住民総出で儀式と直会を行っていた。1980年代からは、祭日が平日の場合に「勤め人」が参加困難なこと、若い世代の「集団主義」との反発から、当屋を廃して各世帯が個別に金屋子神社へ参拝する形式に変化した。

③には、見舞い、葬式、長寿祝いが該当する。これらの変化は多様であるが、参加義務を課す範囲の縮小（見舞い¹⁷）、企業や公的機関が提供するサービス・施設の利用（葬式・長寿祝い）、行事の短縮（長寿祝い¹⁸）に要約される。葬式では変化に対して心理的抵抗が強かったが、人口減少と高齢化に伴う個人負担の増大から、葬儀業者や仕出し業者の利用が2000年ごろから一般化した。

このように、現在の追神集落では、1955年に行われていた16の共同作業のうち13が廃止・縮小され、待神社・愛宕神社・金屋子神社・比太神社の各祭礼に関わる共同作業しか従来の規模や様式で行われていない。こうした実態は、とりわけ日常的な場面での人間関係が、農業の機械化、公共インフラの整備、生活の社会化、就業形態・ライフスタイルの変化などから、希薄化・弱体化したことを示す¹⁹。

3. ウシクヨウの芸能をめぐる変化

1980年代以降の比田地区では、ウシクヨウの芸能を地域の「伝統文化」とする認識の確立（以下、伝統化）と、それらを「地域資源」として活用する動き（以下、資源化）が順次みられた。

伝統化の嚆矢は、カシラウチに対する広瀬町の無形民俗文化財への指定（1981〔昭和56〕年）であった。先述のように、カシラウチは大正期に成立した新芸能であり、その芸態は戦後の改良を経て整えられていった。それが「文化財」の範疇で語られ、演者らが「伝承者」として公的に扱われるようになった。それまで同時代的な娯楽として享受されてきたウシクヨウの芸能が、地域住民の

¹⁷ 近年では、見舞いを各人が行うより、代表者を出すほうが簡便でよいとする隣保もある。

¹⁸ 祝うべき者が出た家では、自家を当屋として、朝・昼・晩三回のご馳走を集落の全住民に振る舞っていた。しかし、1950年代からは、公会堂で昼間に式典を行い、晩だけご馳走を振る舞うように変化した。

¹⁹ なお、追神集落では、2000年ごろからカラオケ会（7月下旬～8月上旬、納涼の意味を込めて追神公会堂にて焼肉とカラオケ大会を行う）を行っている。それは、集落内部における近所付き合いの欠如を危惧した住民たちが、社会関係の再構築のために広瀬町の支援を受けて創出したイベントであった。

文化的出自と関係する「遺産」として反省的に捉え直されたといえる。

伝統化の動きは、1988～1989（昭和63～平成元）年の「ふるさと創生事業」を通じて本格化する。広瀬町は、同事業の一環として「地域づくり推進事業」を行った。それは、「（地域住民が）自ら考え実践することによって自分たちの地域づくりを行う」（広瀬町 1991: 882, 括弧内は筆者）もので、「地域づくり支援」として総額2,000万円の事業資金を町内9地区に配分した。比田地区にも380万円が配分され、その使途が比田地区活性化推進協議会（以下、協議会）の常任委員13名に一任された。彼らは予め実施案を少数に絞り込み、地域住民にアンケートを行った。その結果から、スポーツ振興整備事業（予算80万円）と、ウシクヨウの復元（予算280万円）を決定した²⁰。

この復元事業での重要課題は、地域住民の理解促進と資金不足の解消であった²¹。これらの問題を解決するため、協議会はPRビデオを作成して地域住民に理解と協力を促し、資金の不足を補うべく寄付を募った。PRビデオ冒頭に収録された、協議会の呼びかけを以下に示す。

「私たちの住む比田も年ごとに子供や若者が減りお年寄りが増えてきています。…今、大切なことは、恵まれた自然環境を活かして、現在住んでいる人たちが、心ふれあって共に生きていくということです。そのためには老いも若きも一緒になって、世代を超えた交流が必要です。私たち、ふるさと創生1億円事業比田地区活性化委員会（協議会）では、アンケートを実施しながら検討を重ね、一定の方向を定めていました。それは、比田の長い歴史と農民の願いの中で生まれてきた伝統文化を地区民みんなで守りながら実施する牛供養・花田植（ウシクヨウと同義）の計画であります。…みんなで取り組むパワーを期待するものです。このエネルギーが、これからの地域づくりに不可欠なものだと信じています。（括弧内、下線は筆者）」

ここでは、ウシクヨウを「比田の長い歴史と農民の願いの中で生まれてきた伝統文化」とすることが、必ずしも自明ではないことに注意を払いたい。それは、長らく地域住民（農民）の大きな娯楽であったとはいえ、本来的には明治期の家畜商が牛馬供養として開催してきたものである。それを「農民の伝統文化」と定義することには、現在の立場からウシクヨウへの認識を再構築する試みを含んでいた。

ともあれ、ウシクヨウの復元は、地域住民の賛同と多額の寄付金に支えられ、1992（平成4）年5月に実現した。事業は対外的にも好評を博し、県内外から約5千人の観光客を集めた。同年6月号の『広報ひろせ』は、「忘れ去られようとしているふるりの伝統文化が、世代を超えた人と人とのつながりの中で、…今よみがえりました」、「観客は…長い間に培われた農民の伝統文化に思いをはせていました」と報じている（広瀬町 1992: 1060-1061）。これを契機に、「ふるり」たる比田地区の「伝統文化」として、ウシクヨウが広く認知されるようになった。

²⁰ 前者においては玉入れ用の玉と卓球台の購入、グランドゴルフ場の整備が行われた。残りの20万円は比田地区活性化推進協議会の活動費に充てられた。

²¹ 後者に関して事業決算書を見ると、飾鞍の制作費用、代掻き牛を提供する畜産家への謝礼を中心に出費がかさみ、280万円の予算に対して578万円を支出している。

以上の伝統化の成功に基づき、2000年代以降、ウシクヨウが「地域資源」として積極的に活用される。その端緒は、大字西比田での圃場整備事業（2001〔平成13〕年完了）に伴う公共事業誘致であった。つまり、比田地区は区画整理の過程で一定規模の共有地を生じさせ、合併後の安来市に新規道路の敷設や公共施設の建設を申し出た。結果、産地直売施設「比田いきいき交流館」（以下、交流館）の建設が実現した。2004（平成16）年11月竣工の同施設は、「中山間地域の活性化を担う重要な施設」として、「地域の産業振興」と「地域間交流の拠点」機能を担うとされた（安来市2005：3）。比田地区にも交流館の指定管理者である「いきいき比田の里管理組合」（以下、管理組合）が設置され、一口2万円で交流館に出品する権利を有する組合員が募集された。

管理組合の事業は、当初、交流館で農産物等を販売するだけであった。しかし、売り上げは伸び悩み、運営開始から1年後、集客イベントを企画・実施する必要性に迫られた。そこで管理組合は、1992年に成功したウシクヨウに注目した。彼らは、ウシクヨウから代掻きと牛馬飼養の儀式を省略して「花田植え」とし、その上演と農産物等の販売を組み合わせた「花田植えと山菜祭り」を考案した。同事業は、秋季の「里山の芋煮祭り」とともに、安来市の「地域トライアングル事業」（市民の連携・連帯を深化に基づく地域づくりを促進する事業、助成期間は3年間）に採択され、2006（平成18）年春季から、交流館前の水田で開催されることになった。なお、同事業の助成金申請書には、「比田地区に伝わる農耕文化の継承といきいき交流館を中心とした農産物の販売を通じて消費者や都市（との）交流を推進し、地域の魅力を高める（括弧内は筆者）」と、趣旨説明がなされている。

そして、第一回の「花田植えと山菜祭り」は、想定以上の観光客を集めることに成功した。当時の実行委員会会長は、「久しぶりに復活したら500人からの人が集まりびっくり」、「地元の特産品を生かした多面的なイベントなど、地域の活性化を図るチャンスだと思っています」と感想を述べている（安来市2007：9）。初回の成功を受け、「花田植えと山菜祭り」は継続的に実施されることとなった。現在では、安定して300人程度の観光客を集める地域イベントに成長している。

4. ウシクヨウの芸能がもつ地域的意義

最後に、今日のウシクヨウの芸能（カシラウチ、花田植えを含む）が担う地域的意義について、本章1・2で述べた社会変化から考察する。

まず、高度経済成長期以降の比田地区は、地域社会の存続に関わる問題を抱えていた。それには、(i) マクロかつ外的環境の変化に伴うものと、(ii) ミクロかつ内的環境の変化に伴うものがあった。前者は、産業構造の転換から地域の経済基盤が弱体化し、都市部への経済的依存が高まったことを指し、後者は村落内での人間関係が希薄化したことを指す。ウシクヨウの芸能に対する伝統化・資源化は、こうした地域社会が抱える二つの問題への対応策であった。その根拠を以下に挙げる。

- ①ウシクヨウの復元が、地区民総参加のイベント創出による心のふれあい、「世代を超えた交流」、「みんなで取り組むパワー」の醸成を目的としていたこと。

②「花田植えと山菜祭り」が助成を受けた「地域トライアングル事業」が、市民の連携・連帯の深化に基づく地域づくりを目的としていたこと。

③「花田植えと山菜祭り」が、「農村の伝統文化」たる花田植えを核とした、都市住民（観光客）誘致による地域活性化事業であったこと。

すなわち、上記①・②は（ii）の問題に、③は（i）の問題に対応する。このように、現在のウシクヨウの芸能には、地域住民を交流させて社会関係を再構築する機能と、都市－農村間の交流を促進して地域経済を立て直す機能が付与されている。同行事を「ふるさと」や農村の「伝統文化」とする認識の確立は、かかる「二重の交流装置」が機能するための条件であった。

VI おわりに

従来、中国地方の大田植は、田楽成立以前の芸態を今に伝える民俗芸能、あるいは「日本人」の古い信仰を残す稲作儀礼とされ、主に日本文化の過去を解明する手掛かりとして注目されてきた。それに対し、本稿では、近年における民俗芸能研究の動向を踏まえ、大田植を社会によって構築され続ける存在として捉え直し、それが民俗芸能としてたどった軌跡を地域との関係から探求した。具体的には、島根県安来市広瀬町比田地区のウシクヨウを事例とし、江戸後期から明治期、大正・昭和期、平成期の3時代区分を設け、それぞれに上演の状況やその歴史的・社会的背景、地域的意義を探ってきた。本稿の最後に、それらの結果を統合・整理すると、表7のようになる。

表7 比田地区におけるウシクヨウの歴史的変遷

	形式	歴史的・社会的背景	主催者	主な目的・地域的意義	備考
江戸後期	ウシクヨウ	待神社の正遷宮	追神集落の住民	土地の守護神への奉納	まもなく衰退
明治期	ウシクヨウ	畜産業の発達 家畜商の台頭	地区内の家畜商	牛馬供養 家畜商の個人的欲求の充足 地域住民の娯楽	牛馬の流通構造 の変化により衰退
大正期	カシラウチ	ウシクヨウの衰退	各イベント開催者 (地区外)	イベントの余興	大正初期にウシクヨウから創出
昭和期	ウシクヨウ	終戦直後の停滞感	比田村の青年団	比田地区の活性化	単発的な開催 (1946年)
	カシラウチ	娯楽の欠乏感 地区内での火事	各イベント開催者 (地区外) 西比田4集落の住民 (ニギワイの主催者)	イベントの余興 西比田4集落の活性化 (1970年代半ばまで) 火伏の神への奉納行事 (1970年代半ばから)	
平成期	ウシクヨウ	過疎化、高齢化、 地域経済の衰退 人間関係の希薄化	比田地区活性化推進 協議会	「ふる里」の「伝統文化」 地域住民相互における交流・団結の促進	単発的な開催 (1992年)
	カシラウチ	地区内における火事	西比田4集落の住民 (ニギワイの主催者)	火伏の神への奉納行事	
	花田植え	過疎化、高齢化、 地域経済の衰退 人間関係の希薄化	いきいき比田の里管 理組合	都市ない農村の「伝統文化」 都市住民（消費者）との交流を通じた地域経済活性化の核	ウシクヨウの代 掻きを省略し、 2006年に創出

このように、比田地区のウシクヨウは、地域を取り巻く社会情勢の変化や地域社会内部における出来事に素早く反応し、その目的や意義を柔軟に変化させてきた。形式（式次第や芸態）も決して固定的ではなく、江戸後期～明治期に伝播・定着したウシクヨウの芸態からカシラウチや花田植えが新たに考案され、それらが時と場合に応じて選択的に上演された。こうした大田植のダイナミズムは、従来のような「古風」や「始原」の解明を目指した研究では見落とされていた実態である。もちろん、本稿で示すことができたのは、中国地方で広く伝承されている大田植のごく一例に過ぎない。伝承者や関係者の高齢化によって古い時代を対象とした調査・研究が難しくなるなか、新たな視点からなるべく多くの事例研究が蓄積される必要があると考えられる。

〔付記〕現地調査にあたっては、井上幸治氏、岩田秀雄氏をはじめ、安来市比田地区の皆様にも多大なる協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

《文献》

- ・明本理文 2003. 安部田嘉右衛門. 広瀬町文化協会機関紙HIROSE 2003年12月号：1-10.
- ・岩永 実 1961. 中国山地のたたら. 石田 寛・岸本 実・浜田清吉・山崎 修編『日本地誌ゼミナールⅣ 中国と四国』82-100. 大明堂.
- ・岩本通弥編 2007. 『ふるさと資源化と民俗学』吉川弘文館.
- ・植木行宣 1982. 田楽の村. 藝能史研究会編『日本芸能史2』172-199. 法政大学出版局.
- ・牛尾三千夫 1986〔1942〕. さんばいの性格とその祭式. 牛尾三千夫『大田植の習俗と田植歌』150-177. 名著出版.
- ・北広島町教育委員会生涯学習課編 2017. 『壬生の花田植現況調査報告書』北広島町文化遺産保存活用実行委員会.
- ・金 賢貞 2013. 『「創られた伝統」と生きる—地方社会のアイデンティティー—』. 青弓社.
- ・供盛団編集部 1975. 牛供養について. 広報ひろせ221：862-863.
- ・久保田 2014. 民俗芸能（特集 日本民俗学の研究動向（2009-2011））. 日本民俗学277：100-177.
- ・鳥根県内務部 1913. 『鳥根縣之畜産』鳥根県内務部.
- ・鳥根県内務部1916. 『農事資考 第十五』鳥根県内務部.
- ・第三回中國五縣聯合畜産共進會鳥根縣協賛會 1903. 『増補 鳥根縣産牛馬沿革誌』第三回中國五縣聯合畜産共進會鳥根縣協賛會.
- ・帝国競馬協會 1982〔1928〕. 『日本馬政史 四』原書房.
- ・農商務省 1891. 『明治二十一年度 鳥根縣畜産及獸醫調査』農商務省.
- ・橋本裕之 1996. 保存と観光のはざままで. 山下晋司編『観光人類学』178-188. 新曜社.
- ・廣島縣畜産組合聯合會 1981〔1931〕. 廣島縣之畜産. 昼田 栄編『広島県農業發達史 資料編』

- 681-906. 広島県信用農業協同組合連合会.
- ・ 広瀬町 1991. 地域づくり推進事業. 広報ひろせ (平成3年6月20日号) : 6-8.
 - ・ 広瀬町 1992. 農村の文化ここにふたたび 比田「牛供養・花田植」46年ぶりに復活. 広報ひろせ (平成4年6月20日号) : 2-3.
 - ・ 広瀬町史編纂委員会 1968. 『広瀬町史 上巻』 広瀬町役場.
 - ・ 安来市 2005. 平成16年12月定例会 所信表明・主要議題. 広報やすぎ (1月号) : 2-3.
 - ・ 安来市 2007. 昔ながらの農村絵巻広がる 比田の花田植え. 広報やすぎ (6月号) : 8-9.